

市民の会つうしん

No.2025.10

牧之原市市議会議員候補予定者の回答を公開します。

牧之原小中一貫校（義務教育学校）を考える市民の会では、市議会議員選挙公示日前の10月8日～13日に、立候補予定者（前職、新人）に、学校再編計画に対する考え方を質問しました。
以下に、内容と回答をお伝えします。

【各立候補予定者の回答】(敬称略)

- 回答欄は名簿順(前職)に、また内容は原文のまま掲載しています。
- 新人No.14～16については、告示前に質問したため、立候補の情報がわからず実施できておりません。
- 「無回答」→回答がありませんでした。

質問1

「牧之原市義務教育学校施設整備基本構想・基本計画」(2024.1月策定)について、賛成ですか、反対ですか？また、その理由をお聞かせください。

No.	予定者名	賛成	反対	その理由※
1	石山和生(現)			無回答
2	谷口恵世(現)	○		人口減少が進む中で、学校の再編は避けて通れない課題です。 しかし、それを「学校を減らすため」ではなく、牧之原市の教育を未来につなぐための再構築と捉えています。 行政が示しているように、施設の老朽化対策や教育環境の均質化は重要です。 一方で、私は議員として、**「子どもたちにとって最善の学びの場となるか」**という視点を常に持ち、計画の進行を丁寧に見届けていく責任があると考えています。 この再編をきっかけに、 ・子どもの主体的な学びや探究教育の推進、 ・地域とつながるコミュニティ・スクールの深化、 ・不登校・多様な学びへの柔軟な支援体制の充実、 を進めることができれば、牧之原らしい新しい教育の形が実現できると考えています。
3	絹村智昭(現)			無回答
4	名波和昌(現)			無回答
5	加藤 彰(現)			無回答
6	木村正利(現)	○		その後の計画の確認は必要です。市民との合意形成
7	松下定弘(現)	○		①少子化の歯止めは否めない。 ②今ある建物(校舎)の老朽化 ③津波浸水地域に現在あること ④小中一貫校として、子どもたちを見る中学生と、慕う小学生の相乗効果に期待したいこと(とは言え、いじめが無くなるとは言っていません。少なくとも、子どもたちの可能性に期待したいです。) ⑤新しい学校での未知数の可能性を期待したい。 ⑥議員となって、最初の事業ではなく、既に計画の事業であり、懸念する大きな問題もないことであり、9割の議員が賛成しています。
8	濱崎一輝(現)			無回答

9	原口康之(現)			無回答
10	鈴木長馬(元)			検討中のため賛成でも反対でもない。
11	篠崎あきこ(新)			どちらともいえない。実際に通学予定になる子どもの親世代のご意見をたくさん聞いた中で考えたいです。須々木区は小学校がなくなったことで子どもがとても少なくなったように感じます。私は須々木小学校に通っていた親を持つ世代ですが、学校から遠い地域にわざわざ若い世帯が居住区として選ぶのか？という疑問があり、慎重な議論が必要です。
12	菅沼やすひろ(新)			無回答
13	出なわようこ(新)			無回答
14	荻田 信行(新)			
15	中山なおひろ(新)			
16	畠 まさゆき(新)			

質問2

「牧之原市義務教育学校施設整備基本構想・基本計画」には以下の問題が指摘されていますが、認識していますか。

- 2-①学校規模が1000人を超えると、子どもに目が行き届かなくなり、いじめや不登校が増える。
- 2-②小規模校の方が大規模校より成績が良いので、大規模化により学力が低下する。
- 2-③通学用のバスの運行に膨大な費用が毎年かかる。
- 2-④学校が遠くなるため子どもが地域で過ごす時間が少なくなる。
- 2-⑤大規模校舎の光熱水料、維持費、補修費の負担が大きい。
- 2-⑥2023年開校予定の榛原校周辺は洪水・浸水区域である。

No.	予定者名	2-①		2-②		2-③		2-④		2-⑤		2-⑥	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
1	石山和生(現)	無回答											
2	谷口恵世(現)		○		○	○		○			○	○	
3	絹村智昭(現)	無回答											
4	名波和昌(現)	無回答											
5	加藤 彰(現)	無回答											
6	木村正利(現)		○	-	-		○		○		○	○	
7	松下定弘(現)		○		○	○		○		○		○	
8	濱崎一輝(現)	無回答											
9	原口康之(現)	無回答											
10	鈴木長馬(元)	○			○	○		○			○	無回答	
11	篠崎あきこ(新)	どちらともいえない	○		○		○		○		○		○
12	菅沼やすひろ(新)	無回答											
13	出なわようこ(新)	無回答											
14	荻田のぶゆき(新)												
15	中山なおひろ(新)												
16	畠まさゆき(新)												

No.2 谷口恵世氏：

①大規模化により、いじめや不登校が増えると思うか

回答：いいえ（思いません）

理由：

私は「学校の規模」がいじめや不登校の主な原因になるとは考えていません。

現段階でも牧之原市内の不登校は増加しており、

それは学校の大小に関係なく、社会全体の人間関係の希薄化や多様な価値観の中で生きづらさを感じる子どもが増えていることが背景にあります。

むしろ大切なのは、こうした課題を「学校教育の中でどう解決していくか」という視点です。

子どもたちが互いに理解し合い、他者を思いやる心や、自分の気持ちを伝える力を育むことができれば、大規模校であっても、いじめや不登校を減らすことは十分に可能だと思います。

そのためにも、コミュニケーション能力を育てる授業や体験活動の充実、心理的サポート体制の強化（スクールカウンセラー・ソーシャルワーカーの拡充）、教職員と家庭・地域が連携し、子どもを見守る体制づくり、を新しい学校の中で実現していくことが必要です。

私は、新しい義務教育学校がそのような“人と人が支え合う教育”を実践できる場となるよう、議員の立場からもしっかりと支えていきます。

②大規模化により学力が低下すると思うか

回答：いいえ（思いません）

理由：

私は、学力の向上や低下は「学校の規模」ではなく、教育の質と子ども一人ひとりへの丁寧な関わり方によって左右されると考えています。

大規模化によって生じる課題もありますが、それを補う体制を整えれば、むしろ子どもたちが互いに刺激し合い、より多様な学びが生まれる可能性もあります。

現段階でも牧之原市内では、不登校の増加や学習意欲の格差が見られます。

これは学校の大小の問題ではなく、子どもが自信を持ち、自分の学びに意味を見いだせる教育ができるかどうかに関わる課題です。

新しい義務教育学校では、ICTや少人数指導、協働学習などを活かして、

一人ひとりの興味や得意を伸ばす「個別最適な学び」を進めていくべきです。

そのような教育環境を整えることができれば、学校の規模に関係なく、子どもたちが生き生きと学び、確かな学力を身につけることができると言えます。

③通学バスの費用が増大することについて

回答：はい（費用は増大すると考えます）

理由：

現状、牧之原市内では一部の小学校でのみバス通学が行われており、多くの学校では徒歩通学です。

したがって、再編により通学距離が長くなる地域が出れば、ただし、ここは「費用が増える=悪い」ではなく、子どもの安全をどう守るか、保護者の負担をどう軽減するかという観点で考えるべき課題だと思います。

徒歩通学には、体力づくりや地域との関わりなどの良さがありますが、一方で、事故や防犯面の不安、雨の日の保護者送迎による負担といった課題もあります。どちらにも利点と課題があることを、丁寧に議論していくことが大切です。また、バス運行の費用については、地方交付税などの国の支援制度の活用や、公共交通との連携によって効率的な運行を図ることも可能だと考えています。学校の通学バスを、地域交通の再編とも結びつけることで、新しい「まちの移動の仕組み」を生み出す契機にもなるのではないでしょうか。

④通学距離の増加で地域との関わりが減ることについて

回答：はい（その可能性はあると考えます）

理由：

学校の統合により通学距離が長くなれば、登下校中に地域の方々と顔を合わせる機会が減るなど、地域との日常的な関わりが薄れる懸念は確かにあります。しかし、これは学校再編だけの問題ではなく、地域全体の人口減少や、自治会組織の担い手不足といった課題とも深く関係しています。

現在、各地区の自治会では年間を通じて何回か、立哨や見守り活動を実施してくださっています。登下校の際、地域の大人と挨拶を交わすことでも、子どもにとって大切な地域とのつながりの時間です。

こうした関わりをどう維持し、次の世代に引き継いでいくかが、これからの大好きなテーマだと感じています。新しい学校づくりを進める中で、地域ボランティアや自治会との連携による「見守り活動」の継続、放課後や休日を活用した地域との交流事業の充実、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を通じた地域参画の拡大、など、地域と学校が互いに支え合う仕組みをつくっていくことが大切です。私は、学校再編をきっかけに、地域が子どもを支え、子どもが地域を誇れるような関係を育てていきたいと考えています。

⑤光熱水費や維持費が大きいことについて

回答：いいえ（むしろ減る可能性があると考えます）

理由：

現在、市内には老朽化が進んでいる学校が10校あり、それぞれに維持・修繕・光熱水費がかかっていますこれらを新しい2校に統合することで、建物の集約化による**ランニングコスト**の削減が期待できると考えています。

特に、新設される義務教育学校は、最新の省エネ設備や断熱構造を備えた設計となるため、光熱水費の効率化や、環境への負荷軽減にもつながります。

一方で、学校は単なる建物ではなく、子どもたちの生活と学びの場です。

運営の効率化によって生まれる余力を、教育環境の質の向上、教職員の支援体制の充実、ICTや特別支援教育への投資、などにしっかりと還元していくことが重要だと思います。

私は、財政の効率化を目的とするだけでなく、**「限られた資源を子どもの未来にどう生かすか」**という観点で、持続可能な学校運営を進めていきたいと考えています。

⑥榛原校周辺が洪水・浸水区域であることについて

回答：はい（リスクは認識しています）

理由：

榛原地域の新校予定地が洪水・浸水区域の一部に含まれていることは、行政の説明にもあるとおり事実です。ただし、計画上はL2洪水（想定最大規模の降雨）に対応できるよう、地盤のかさ上げや排水設備などの防災対策を前提に設計が進められています。この点については、専門的な検証や国・県の指導のもとで慎重に進めることが重要だと考えています。一方で、近くを流れる2級河川・勝間田川の氾濫リスクは、近年の豪雨の頻発により高まっています。学校建設の安全性を確保するには、施設側の対策だけでなく、河川整備や浚渫工事の見直しなど、流域全体での治水対策の強化も欠かせません。こうした取り組みを、市や県、関係機関が連携して継続的に進めていくことが求められます。また、「安全だと説明されているから安心」ではなく、

実際の避難経路・通学路・防災計画の実効性を検証し続けることが必要です。

地域・学校・家庭が連携した避難訓練の実施、通学路や避難経路の安全点検の継続、防災教育を通じた「自ら命を守る力」の育成、これらを着実に行なうことが、子どもたちの命を守る基盤となります。私は今後も議会の立場から、計画段階から施工・運用までの安全対策を丁寧に確認し、河川管理の強化を含めて行政に継続的な見直しを求めていきます。子どもたちが安心して学び、保護者や地域の皆さんのが「安全だ」と実感できる学校づくりを進めていきます。

No.7 松下定弘氏

2-①

いいえ

学校規模が増え子どもたちに目が行き届かなくなり、不登校が増える。と決めつけていません。目が行き届かなくなるとは、先生のことを仰っていると考えますが、逆説的に、中学生を扱う先生も、居ることから、全てが悪い方向に行く事は、無いと考えます。先生のなり手不足の解消にもなるのでは、無いのでしょうか?

2-②

いいえ

必ずしも、そうとは言えません。

2-③

はい

通学用のバスについては、議論が議会でも出ました。費用以前に子どもたちの安全には、バス通学が必要であり、市長に[無償]の確認を全員協議会で、とっています。

2-④

はい

確かにご指摘のとおりです。

その代わりに新しい学校での、新たな出会いや子どもたちの順応性に掛けて見たいです。一貫校の視察先では、こうした内容を校長先生が熱く語っていました。旧校舎の利活用で、子どもたちとのコミュニケーションが、取れる事業を考えたいと思います。

2-⑤

はい

確かに維持費や光熱費の負担はあると考えますが、古い校舎で勉学をするより、新しい校舎で環境の良い学習の場を与えて上げたほうが、子どもたちにとっては、良いと考えます。第一は子どもたちと考えます。

2-⑥

はい

ご指摘の通り、榛原地域の学校は、浸水区域と認識は、ありました。学校の周りの道路や、グランドを利用した浸水対策を市長から聞いていますので、しっかりと事業を確認して、行きたいと思います。

質問3

牧之原市には、人口流出や地区の衰退なども問題があり、学校には教職員の疲弊、不登校・いじめなどの問題があります。このような状況において、牧之原市の学校はどうあればよいと思いますか。そのための具体策を、お聞かせください。

No.	予定者名	具体策
1	石山和生(現)	無回答
2	谷口恵世(現)	<p>私は、「新しい学校」は単に新しい建物を建てることではなく、新しい教育のかたちをつくることだと考えています。人口減少の中でも、子どもたちが「このまちで学びたい」「このまちで育ってよかったです」と思える学校であること。そして、地域が一体となって子どもを支え、共に育つこと。これこそが、牧之原市が目指すべき“新しい学校像”です。</p> <p>1. 子どもが真ん中の教育環境づくり 不登校やいじめの背景には、「自分の居場所が見つからない」「理解してもらえない」という子どもの孤立があります。これを解消するには、「同じ学びを全員に」ではなく、一人ひとりの個性・ペース・興味に合わせた学びの多様化が不可欠です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個別最適な学び(ICT活用・少人数指導) ・探究学習や体験を重視した学び ・心理的安全性を高める教職員の支援体制の整備 <p>子どもの数が減っても、教育の豊かさを減らさないことを。それが未来への投資だと考えます。</p> <p>2. 地域とともに育つ学校 「地域と共にある学校」は、これから牧之原市にとって欠かせません。地域の人が学運営に関わり、子どもが地域の人から学び、世代を超えて支え合う——こうした循環を生むのが、新しい学校の役割です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティ・スクールの機能をさらに発展させる ・地域ボランティアや地元企業と連携したキャリア教育 ・放課後や休日を活かした地域交流・体験活動の推進 <p>地域で子どもを育てるという文化を、新しい学校が地域の中心として再生していくことが理想です。</p> <p>3. 教職員の働き方改革と支援体制の充実 学校を支えるのは「人」です。教職員が疲弊してしまえば、どんなに新しい学校でも教育の質は保てません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員のチーム体制強化 ・外部人材(スクールソーシャルワーカー・支援員など)の活用 ・子どもと向き合う時間を確保するための業務改善 <p>教育現場が笑顔であれば、子どもも笑顔になります。</p> <p>4. 「居場所」としての学校へ 学びの場であると同時に、子どもにとって学校は「心の居場所」でなければなりません。そのためには、学びの多様化だけでなく、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内外に複数の居場所(支援教室・オンライン学習・地域拠点)を確保する ・子どもの声を教育づくりに反映する「児童生徒参加」の仕組みをつくる <p>ことが必要です。地域全体で子どもを支えることで、**大人も子どもも幸せを感じられる「居場所**を育てていくことができます。</p>
3	絹村智昭(現)	無回答
4	名波和昌(現)	無回答
5	加藤 彰(現)	無回答
6	木村正利(現)	少子化は止まりません。今現在の相良1校、榛原1校について皆さんで校歌を1つにして、例:牧之原小中学校として相良教場、榛原教場にする事により、多様化する問題…不登校になった時、榛原 ⇄ 相良と受け入れできる体制は必要だと考えます。教職員については県内だけでなく、京都市の進める教職員のインターナーシップ制の導入、そしてやる気のある人々を広く求めていったら良いと思います。

7	松下定弘(現)	ご指摘の通り、人口流出や地域の衰退問題では、特効薬は見つかりませんが、教育、文化に関しては、委員会があります。[文教厚生委員会]そして、建物や人口流出の課題には、[総務建設委員会]の組織委員会があり、毎年テーマを決めて、市長に[提言書]を提出しております。 ホームページ等で具体的な取り組みを行政に行うよう提言しております。また、観覧できます。全てが提言書の通りに事業が運ぶのか?議員は、そうしたところも、チェックしなければならないし、行政も提言書の中身から、計画者の作成を行います。ですから、提言書は、事業計画の道筋にもなります。よろしければ、一度、見て頂きたく思います。 以上、長くなり申し訳ありませんが、お答えさせていただきました。 ありがとうございます。
8	濱崎一輝(現)	無回答
9	原口康之(現)	無回答
10	鈴木長馬(元)	今まで具体策は提言されてきており、その中において、より良い具体策はわかりません。今までの策で解決できれば解消していたと思います。
11	篠崎あきこ(新)	とても難しい問題なので、今のところ考えられたことだけで申し訳ありません。 ○適応指導教室フルールのような支援施設を増やす ○地域と子どもたちの繋がりを持つるようなしくみをつくる (地域ごとに合った形があると思いますので、抽象的で申し訳ありません)
12	菅沼やすひろ(新)	無回答
13	出なわようこ(新)	無回答
14	荻田信行(新)	
15	中山なおひろ(新)	
16	畠 まさゆき(新)	